

トールキンの *The Hobbit* とその背景

Tolkien's *The Hobbit* and its Literary Background

奥 西 洋 子

オックスフォード大学の教授であったトールキン (J. R. R. Tolkien) は、早くから創作に関心があった。学生時代に、さかんに詩の投稿を行っている。次の創作が、彼の死後、1976年に出版された絵本、*Father Christmas Letters*¹⁾ であるが、これは、1925年から1943年までの、子供たちに当てたクリスマスカードを集めたものである。

このようにトールキンにとって、創作は、元来、わが子を楽しませるためのものであった。最初の本格的創作となった *The Hobbit*²⁾ も同様に、子供たちに読み聞かせながら成立した。けれども、一番楽しんだのは父親ではなかったか、とも思われるのである。

1 なぜ、ナゾナゾなのか

「面白くなりそうだわ」と、アリスは思った。“Why is a raven like a writing desk?” と、ナゾナゾをかけられた時のことである。結局、このナゾナゾには答えがないので、アリスは激怒することになるのだが、アリスが思わずワクワクしたように、ナゾナゾは常に子供の心を捉えて離さない。だから、世界に名高い Nursery Rhyme にもナゾナゾが登場することになる。たとえば、次の例のように。

Humpty Dumpty sat on a wall,
Humpty Dumpty had a great fall.
All the king's horses,
And all the king's men,
Couldn't put Humpty Dumpty together again.³⁾

答えは卵である。

そして、また、ピーター・ラビットのシリーズによって一世を風靡したビアトリクス・ポター (Beatrix Potter) も、その最高傑作と思われる、*The Tale of Squirrel Nutkin*⁴⁾ をナゾナゾで埋め尽くしたのであった。

さて、*The Hobbit* のハイライトは、第五章、'Riddles in the Dark' である。暗いトンネルをゴブリン (goblin) に追われて遁走する混乱の中で、ドワーフ (dwarf) のドーリの肩から落ちたビルボウ・バギンズは、失神から覚めてみると、仲間もなく、光もなく、出口も知れない暗闇に取り残された事を知った。この最悪の状況で、文字どおり手探りで這って進むうち、ふと手に触れたのがマジック・リングであった。が、ビルボウは、まだ、その魔力を知らない。知らないまま出会ったのがゴラムであった。ゴラムは正体不明の怪しい生き物である。ビルボウとゴラムの間に、ナゾナゾの勝負をして、ビルボウが勝てば、トンネルの出口を教わる、ゴラムが勝つと、ビルボウを食べる、という取引が成立した。

こうして、ビルボウは、遊びであるナゾナゾに命をかけるという奇妙な状況に追い込まれた。このナゾナゾ遊びが無類に面白いのである。ビルボウは「食べられる」という恐怖から逃れられないために、彼の出すナゾナゾは、食べることに、食べ物へと偏っていく。たとえば、

A box without hinges, key, or lid,
Yet golden treasure inside is hid. (p. 72)

の答えは、ゴラムの言う通り、'Eggses it is !' (p. 73) である。この一言でわかるように、ゴラムの言葉には強い訛りがある。

ナゾナゾに関する限り、ゴラムのほうが、はるかにウワテである。彼のナゾナゾは、

Voiceless it cries,
Wingless flutters,
Toothless bites,
Mouthless mutters. (p. 71) (風)

This thing all things devours :
Birds, beasts, trees, flowers ;
Gnaws iron, bites steel ;
Grinds hard stones to meal ;
Slays king, ruins town,
And beats high mountain down. (p. 74) (時)

などであり、ビルボウのような単純なナゾナゾではない。もっとも、ビルボウは恐怖のために頭が鈍っているのである。その上、ゴラムは、「こいつは美味いかな、水気はあるかな、噛み応えはよいかな」などと呟きながら、ジイーッとビルボウを物欲しげに見詰めたりする。

ナゾナゾ遊びの緊張は、次の引用の個所で頂点に達する。ビルボウはナゾナゾを思いつかなくなったのである。その上、ゴラムにヤイヤイ急き立てられ、ますます混乱する。

‘It’s got to ask us a question, my precious, yes, yess, yesss. Jusst one more question to guess, yes, yess,’ said Gollum.

But Bilbo simply could not think of any question with that nasty wet cold thing sitting next to him, and pawing and poking him. He scratched himself, he pinched himself ; still he could not think of anything.

‘Ask us ! Ask us !’ said Gollum.

Bilbo pinched himself and slapped himself ; he gripped on his little sword ; he even felt in his pocket with his other hand. (pp. 74-5)

そして、たまたま拾った指輪に触れたビルボウは、「僕はポケットに何を持っているんだろう」と独り言を言い、それをナゾナゾと勘違いしたゴラムに、辛くも勝つことができたが、フェア・プレイではないだけに、少し後味の悪い勝ち方をしたと言えよう。

トルキンが *The Hobbit* のハイライトにナゾナゾ遊びを置いたのは何故だろうか。ひとつには、子供の心に訴える力が大きいからであるが、それだけではないだろう。トルキンはオックスフォード大学で、古英語 (OE) と中世文学の教授であった。学者として「天才」と呼ばれた人である。現代英語と同じスピードで OE で書くことができた人である。中世文学とのつながりもあると思われる。

古英語の文学には謎詩が90編、現存していて、10世紀後半に成立したといわれる。その題材は、「ふいご」や「鍵」、「ペン」などの日常生活に使われる道具が圧倒的に多い。現実的な国民性の現れであろう。次に多いのが、鳥や牛など身の回りの動物で、愛情を込めて歌われている。その他は、自然現象、武具、食品、海に関係するもの、聖書などが、ほぼ同じくらい取り上げられている。単独の題材で最も多いのは「船」であり、さすが島国だけあって船旅への関心が強い。OE の抒情詩には『海行く人』(‘The Seafarer’) もある。

こうして見ると、具体的な題材ばかりだと思われそうだが、「言葉」、「靈魂と肉体」のような謎詩もあり、特に「言葉」は、その性格を見事に捕らえた素晴らしい詩である。

これらの謎詩の作者は、かつては、キリスト (‘Christ’)、ヘレナ (‘Elene’)、ジュリアナ (‘Juliana’) その他の宗教詩の詩人として名高いキネウルフ (Cynewulf) であるといわれた。そして、これら謎詩の写本を持っていたのが、エクセター大聖堂の初代僧正であり、エクセター大聖堂に寄贈したという。OE の謎詩は聖職者を中心とした、恐らく当時最高のインテリによって、磨き上げられた作品なのであろう。トルキンは高度に知的な伝統を持つ謎詩に着目し、それをハイライトに置いたのだと私は思う。

ここに謎詩を一編、引用したい。答えは「船」である。

我は元気あふれる 輝く頭をもった
速い馬が 平原を
力強く走って 旅するのを見た。
その背には 戦力——
戦闘員を乗せていた。 戦士は
飾り鉾ついたものに乗っていた。 高速で流れる
広い道が 誇り高い
鷹を運んだ。 旅路はいっそう輝かしかった、
これらの旅は。 告げよ、わが名を。⁵⁾

ビルボウは後に竜のスマウグ (Smaug) と対面し、ナゾナゾのような会話を交わす。これは竜に正体を明かさない用心であるが、彼は、この時は、いささか調子に乗ってナゾナゾ会話を楽しんでいる。

2 モンスターの効用

1936年のアンドルー・ラング記念講演として、トールキンは、'Beowulf: The Monsters and the Critics'⁶⁾ と題する講演を行った。この講演は非常に好評で、学者としてのトールキンの名声を、いっそう高めたといわれる。Beowulf は OE で書かれた最も優れた詩である。

若き日のベイオウルフが、デンマークを荒らすモンスター、グレンデル (Glendel) と、その母親を退治して祖国 (スウェーデンの一地方) へ帰る。やがて、叔父の死により王位につき、数十年の年月を経て老境に達したとき、火竜が現れて人々を悩ますのを見て、これと戦って、かろうじて退治したものの、自らも傷を受けて死ぬ。人々は岬の突端で、遺体を火葬にふし、塚を築き、挽歌を歌って彼を惜しむ。これが Beowulf の概要である。⁷⁾

従来、Beowulf の欠点は、モンスター退治が中心で、他にほとんど何も無いことだとされて来た。トールキンは北方神話の特性に着目する。栄光ある英雄が避けられない滅亡に直面することがテーマであるから、その滅亡は悪意の権化というべき竜によらなければならない。そして、それならば、以前に勝ち得た栄光も同じスケールのもの、つまり、モンスター退治によるべきであろう。それによって宇宙的大きさを与え、人間の運命を想わせるのである、とトールキンは説いて、モンスターを擁護したのであった。

こうして市民権を得たモンスターたちは、「往きて帰りし物語」 (There and Back Again)

である *The Hobbit* にも登場する。巨人トロール (Troll)、吹雪を起こす岩の巨人 (Stone-giant) など。ゴブリン (Goblin) やオルク (Orc) のような卑小なものは、モンスターの名に値しないであろう。ゴラムも同じ。⁸⁾

そして、なによりも竜のスマウグが居る。

3 竜について

ヨーロッパには竜に強い関心を示す伝統があるようだ。ギリシャ神話のヘラクレスは竜を退治した。イングランドの守護聖人は竜退治の聖ジョージ (St. George the Dragon Killer) と呼ばれ、後の文学に強いインスピレーションを与えた。これに加えて、8世紀に生まれた *Beowulf* の竜。

1200年ころには『ニーベルンゲンの歌』⁹⁾ が成立した。英雄ジーフリトは竜を退治し、全身に竜の血を浴びたため、不死身の肌となった。彼はニーベルンゲンの宝石、黄金を手に入れ、それを守っていた侏儒から姿を消せる隠れ蓑を奪い取る。黄金、ドワーフ、姿を隠す蓑などと、*The Hobbit* につながる個所が、いくつかある。

また、『アイスランド・サガ』は、ハラルド美髪王 (かの有名なバイユー・タベストリーに、その戦う姿が見られる) の専制政治を嫌って、ノルウェーを去って、アイスランドに住み着いた人々の間で成立した。その題材は、ノルウェーの歴史、アイスランド人の年代記、ゲルマンの英雄伝説などで、『ヴォルスンガ・サガ』¹⁰⁾ は伝説的サガに属する。(ニーベルンゲン伝説)

『ニーベルンゲンの歌』において、ジーフリトの竜退治は、僅か数行の伝聞として語られたに過ぎないが、『ヴォルスンガ・サガ』は、竜退治について詳しい描写があり、興味深い。ヴォルスンガ一族は、北欧神話の主神であるオーディンの子孫とされ、一族それぞれ並ぶもののない勇猛な武人である。一族のシグルズは、養父レギンに竜退治をそそのかされる。名誉が得られるからとレギンは言うが、その実、彼の目的は竜ファーヴニルが守る宝を奪うことにある。竜のファーヴニルは、もともとレギンの長兄で、獰猛な、所有欲が強い人だった。ファーヴニルは父を殺して、その財宝を独り占めにし、やがては竜に化身して、宝の上に伏しているという。『ヴォルスンガ・サガ』は1260年ごろに成立したといわれるが、すでに竜は貪欲と結びついた存在である。

シグルズは竜を刺し殺す。レギンに頼まれて竜の心臓を焼いていたシグルズが、ふと、竜の血をなめると、小鳥の言葉がわかるようになり、レギンの裏切りを防ぎ、竜の宝を手に入れた。彼は比類ない勇者と称えられたが、間もなく、若い身で殺される運命にあった。竜退治の顛末は生々しく、詳細に語られ、書き手自身も強い関心を持って熱をこめて語ったであろうと推測される。これによってヨーロッパ人の竜のイメージが、はっきりと伝わってくる。

ところで、鶴岡真弓氏によると、13世紀に建てられたノルウェーのキリスト教会の身廊(nave)の装飾に、シグルズの竜退治の顛末が彫られているという。¹¹⁾

ノルウェーの教会は木造教会が多数残っていることが、その、ひとつの特徴であるが、たとえば、オスロの木造教会(stave church)の屋根には、空に向かって火を吹く竜の頭が装飾として使われている。¹²⁾ 火竜を持つ木造教会は多数あり、板葺き屋根は竜のウロコを連想させると鶴岡氏は指摘する。¹³⁾

さらに、ストックホルムの Wasa 博物館の資料によれば、ヴァイキング船の船首は北欧サガのシーンを表す彫刻のレリーフで飾られ、その頂上に竜の頭が乗っていたという。¹⁴⁾

北欧人の熱烈な竜への想いが察せられる。

20世紀の英国児童文学にとっても、竜は魅惑的な生き物である。20世紀の古典と呼ばれる *The Wind in the Willows* によって、今なお人々を魅了しているケネス・グレアム(Kenneth Grahame)は、20世紀らしい竜を生み出した。邪悪で貪欲な竜から脱皮して、平和を愛する、知的に洗練された「戦いが嫌いな竜」(*The Reluctant Dragon*)¹⁵⁾の誕生である。

グレアムの竜は平和主義で、詩作に耽り、戦いは絶対に嫌だと主張する。礼儀正しく、「どこからどこまでも真の紳士」(p. 42)で、食事を楽しみ、そのあと暫くまどろんだりする生活が好きである。少し俗物で、村の社交界にデヴューして人気を博すことさえ考えている。

こうした竜の性格は多分に平均的イギリス紳士と似ているわけで、トールキンの小市民的なビルボウ・バギンズの創造に一役買ったのではないかと思う。

一方、竜の出現を聞いて駆け付けた聖ジョージも殺戮は気乗りしない。が、竜と聖ジョージが対面すれば戦いは避けられない。そこで、聖ジョージと竜は八百長の戦いをすることに決める。(p. 49)

村人の人気取りを企む竜は芝居気たっぷりに、初登場を、わざと遅らせることによって観客の期待を高めるといふ劇的手法を使って(常套手段ではあっても、やはり効果的である)、ややしばし聖ジョージを待たせた後、磨き上げた眩い体で、ロケットのように聖ジョージに飛びかかって、たちまち村人たちの好意を一身に集めてしまう。

竜は吠えたり、跳んだり色々な芸を披露して人気取りに余念がない。まさに「全くの役者」である。村人も竜のサービス精神を褒め称え、竜はすっかり気をよくする。調子に乗った竜のやりすぎを恐れた聖ジョージは、あわてて竜を槍で地面に釘づけにして戦いは終わる。とどめはそのうちに、ということで、槍を引き抜くと、聖ジョージは村人たちを宴会へと誘う。竜も勿論、大切な客人として宴会に参加する。宴会は聖ジョージの平和共存を説く演説で始まり、聖ジョージも竜も楽しく酔いつぶれて、いわゆる、パブ・スクロール(pub scroll)そのもの、ひどい千鳥足で歌を歌いながら丘を上っていくのだった。

20世紀の幕開けにふさわしい平和的で教養のある竜である。イギリス紳士を思わせる竜。中世の騎士と現代の政治家の資質を併せ持つ聖ジョージ。間近に迫る戦いを認識せず、抽象

論を楽しむ竜。日和見主義の村人たち。常識を備えているのは、竜と仲良くなった少年だけである。だから、竜も聖ジョージも、少年に「君、まかせるよ」と、のんびりしているのである。少年は困りながらも、ステージ・マネージャーになったつもりで、戦いのリハーサルをするべきだったなア、などと思うのである。こうした芝居好きもまた多くのイギリス人の気質である。

まことにグレアムの竜は現代の竜物語の金字塔である。

20世紀ファンタジーの元祖といわれたイーディス・ネズビット (Edith Nesbit) にも沢山の竜物語があり、*The Last of the Dragons and Some Others*¹⁶⁾ としてまとめられている。発想の面白さと個性的人物の創造を特徴とするネズビットであるが、竜物語については聖ジョージと竜退治の伝統に縛られているのがわかる。例外は1925年に書かれた 'The Last of the Dragons' で、これは、パロディである。ここでは、竜を退治する筈の王子は学問に精進しすぎて武術はさっぱり。王女は武芸が得意な女丈夫である。竜は竜で平和主義者。そこで、三者は意見が一致して竜退治は中止。竜は子供たちを背中に乗せて海水浴に連れ出したりするうち、このハイテクの世の中にあって、もっとモダンな姿がほしいと、遂に飛行機に変身してしまった。

才能あるネズビットにしては、魅力に乏しい作品である。ストーリーに多少の斬新さはあるものの、人物に個性がなく、全体として力がない。グレアムの竜の強烈な個性、平易で美しい文章と比べようもない、荒削りな作品である。

次が、*The Hobbit* のスマウグである。これは、伝統的な邪悪な竜、宝石と黄金の上に寝そべり、山のような宝物を持ちながら、わずかカップ一つ盗まれても怒り狂う、貪欲な竜である。が、スマウグは、あっけなく滅ぼされてしまう。トールキンは伝聞として竜の恐ろしさを想像させることは巧みであるが、竜の殺戮を描写するには不向きであるようだ。彼は悪を直接的に述べることは常に苦手とする。トールキンにはグレアム的な竜のほうが似合うのであろう。

トールキンには、いま一つ、短編小説、'Farmer Giles of Ham'¹⁷⁾ がある。この竜は貪欲ではあるが意気地なしで、農夫ジャイルズに宝を奪われてしまう。この短編はユーモアのある、楽しい小品であるが、その面白さは主としてジャイルズの性格にあり、竜の魅力によるものではないことが残念である。

トールキンと、しばしば竜の話を楽しんでいたオックスフォード大学の同僚に C. S. ルイス (C. S. Lewis) が居る。ルイスの児童文学 *The Saga of Narnia* 全七編のひとつ、*The Voyage of the Dawn Treader*¹⁸⁾ に竜が登場する。少年ユーステス (Eustace) は、意地悪で、ひねくれた性格であり、貪欲のため竜に変身する。その時の驚きと恐怖が見事に表現されている。そして、すっかり性格が改善された時、竜の厚い皮膚は蛇の脱皮のように落ちてユーステスは無事に人間の姿に戻ることができた。けれども、ユーステスは、竜であ

る間が最も輝かしい存在であると私は思う。

これほどヨーロッパで嫌われる竜であるが、東洋では逆に、めでたいこと、誉めることと結びついている。日本では、竜は神秘的な力を持ち、雲と雨を呼ぶと考えられている。そこで、寺院の欄間、襖絵、神社の木彫彫刻などによく見られるのである。そして、平家納経の飾りの一つに、二頭の竜が互いに向き合って息を吹き上げている細工があり、上昇の気運を表し、清盛を象徴的に示したものだと言われる。

中国でも、竜は、めでたいしるしである。

インド神話では、竜は蛇を神格化した人面蛇身の半神であるという。また、仏教では、竜は仏法を守護するものとされる。¹⁹⁾ それならば、清盛の竜は、隆盛を示すだけではなく、仏典守護の意図もあったのだろうか。

このように尊敬と畏怖の念をもって眺められる竜が西欧社会で、なぜ嫌われるのかという素朴な疑問が湧いて来る。

トールキンは、*The Hobbit* の中で、竜を表す語として、dragon と worm を使っている。さらに、'Beowulf: The Monsters and the Critics' には、serpent という語を二回ほど使っている。Oxford English Dictionary (トールキンも若い日、その編纂を手伝ったのだが) の dragon の項目には、19世紀中葉以降使われていない用法として、「巨大な蛇」が挙げられている。「悪の権化」、「Satan」も。また、worm には、古い用法として、「蛇」、「竜」が挙げられていて、例証として、Beowulf より、pa se wyrm onwoc (2227行) が引いてある。wyrm は、serpent, dragon, worm である。²⁰⁾

このように、蛇との関係が強ければ、キリスト教国が竜を拒むのは当然である。そもそも竜は蛇から連想されたものであろう。そうしてみれば、キリスト教化が遅れた北欧において竜への情熱が強く残っていたのも理解できることであろう。東洋の宗教には、元来、原罪という考えはない。その上、竜は仏法の守護者と考えられたのであるから、竜は神秘的な力を持つ、上昇するエネルギーのシンボルとして、憧れと畏怖の的として存在し続けることが出来たのであろう。東洋における農耕の重要性を考えると、雨を司る竜への畏怖がどれほど大きかったか察せられる。²¹⁾

4 挿絵について

児童文学作品にとって、挿絵は大きな問題である。ルイス・キャロルが、そのよい例であろう。キャロルは『不思議の国のアリス』(*Alice's Adventures in Wonderland*, 1865) を出版した時、当代きってのイラストレーターであったジョン・テニエル (Sir John Tenniel) が挿絵を担当した。キャロルは、自分で挿絵が描けるという事情もあってか、テニエルに実にうるさく注文をつけ、テニエルは二度とキャロルの仕事はしないと怒ったそうであるが、

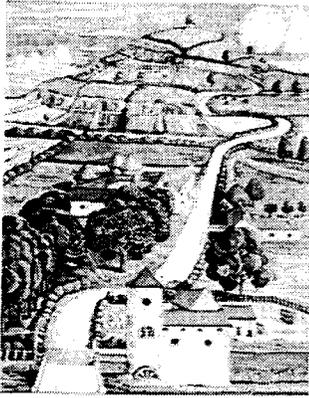
1871年にキャロルが続編の『鏡の国のアリス』(*Through the Looking-Glass and What Alice Found There*)を出した時もテニエルが挿絵を引き受けた。とはいえ、「かつらをかぶったアブ」の章は初版本から抜け落ちて、長い間、行方不明となった。かつらをかぶったアブの絵は描けないと、テニエルが拒んだからだと言われている。²²⁾ よくいわれることであるが、テニエルは動物の挿絵は、どれをとっても感嘆するほど巧い。そのテニエルにしても、「かつらをかぶったアブ」の絵は無理だったのだろうか。彼ならば、素晴らしいアブが画けたのではないか。少し残念である。テニエルはアリスの絵が硬く、やや満足できないところがある。アリスはキャロルの挿絵のほうが、柔らかな少女らしさを出している。が、動物の絵はたいへん下手と言わねばならない。

幸運にも作品の精神を完璧に表すイラストレーターに恵まれた児童文学作家はかなりある。たとえば、ミルン (A. A. Milne, *Winnie-the-Pooh*, 1926) とシェパード (Ernest H. Shepard)、グレアム (Kenneth Grahame, *The Reluctant Dragon*) とペギー・フォートナム (Peggy Fortnum)。²³⁾

新しいところで、ロアルド・ダール (Roald Dahl) と、クエンティン・ブレイク (Quentin Blake) の、絶妙なコンビもある。²⁴⁾

トールキンは母の手ほどきで、7歳からカリグラフィーと絵を習い始めた。芸術的資質はあったのだろう。オックスフォード大学、エクセター・コレッジ (Exeter College) 在学中に、コレッジの雑誌の表紙のイラストを受け持つほどになった。²⁵⁾ *Father Christmas Letters* の挿絵も年を追って絵が巧くなっている。色彩は絵本画家、ブライアン・ワイルドスミスのような鮮やかな色彩を好む。もう一冊の絵本、*Mr. Bliss* が1982年に出版されているが、原稿の再現であるため執筆年代は明らかでない。²⁶⁾ 恐らく、1932年、あるいは、その少し後であろうか。挿絵はかなりよい。特に、建物がていねいに書き込まれていて美しい。人物はコミカルな動きが面白い。風景もイングランドの特徴がよく表れている。色使いも落ち着いた穏やかなものになった。

The Hobbit の豪華版は、作者の手になる13枚の挿絵を含んでいる。²⁷⁾ いづれも、かなり良い絵といえるが、そのうち、とくに面白い4枚、'The Hill (Hobbiton)', 'The Elven King's Gate', 'Beorn's Hall', 'Conversation with Smaug' について、二三の意見を述べてみたい。



(1)



(3)



(4)

(1) The Hill (Hobbiton)

トールキンの理想郷ともいべきホビットンは、この絵から察せられる通り、1世紀ばかり前の典型的なイングランドの田園である。手前の川沿いに水車があって、小麦の製粉をしている。イギリス人好みのうねうね道が曲がりくねって、丘に達する。木が好きだったトールキンらしく、木は光り輝いている。白いキャンドルのような花が咲くのはマロニエであろう。春を迎えた喜びの田園である。やがて、野菜畑などがあり、丘の麓に兎の穴を想わせるホビットの家の丸い玄関扉と窓が並ぶ。つましく、平和な理想の村である。

(2) The Elven King's Gate

旅の一行に好意を持たず、ドワーフたちを投獄した森のエルフの館への入り口である。ホビットンの木々は、それぞれ個性を持って、のびのびと、好きな場所に育っていたが、森のエルフの木々は正確に左右対称に植えられている。恐らく、下枝を落としたのであろう。木の

葉は上方のみ茂っている。森から館の入り口に至るまでシンメトリーである。これは多分、整形庭園 (formal garden) が反映しているのだろう。整形庭園は英国では権力者の力を示すものとして、あまり好まれない。トールキンが森のエルフの非友好的態度を、このような絵に表したのであろう。

(3) Beorn's Hall

これは、美しいと共に最も面白い絵である。一目見て、このホールは教会に似ていると思う。中央部分が身廊 (nave)、二列の柱の外側が側廊 (aisle)、木の柱は列柱に見える。天井の小屋組はキング・ポストよりもっと原始的である。柱の上部の飾りは石柱の飾りを思わせる。教会の構造は初期のカントリー・ハウスに受け継がれたといわれるので、このホールが教会に似ているのは不思議ではないだろう。そして、また、初期のカントリー・ハウスのように炉が切っている。その上部の天井に、煙出しの穴らしいものが見えるので、外から見れば、越し屋根があると思う。全体に、木の美しさが生かされて、暖かい雰囲気を出している。木を愛するイギリス人の好みが見られているといえる。手前のテーブルと椅子は、ごく素朴で頑丈である。大学のホールで学生が食事をしているテーブルと椅子を原始的に再現したように見える。古い大学のホールは古いカントリー・ハウスと同じ形式であるから、大学のホール、カントリー・ハウスのホール、さらに教会が類似するのは不思議ではない。ビオルンのホールは素朴に再現されたカントリー・ハウスのホールなのであろう。

(4) Conversation with Smaug (Smaug's lair)

スマウグの勇姿の美しい色彩と、夥しい財宝に目が眩み、地味な部分に目が行かないが、財宝の後ろに三つの円形アーチが見える。これも中世のカントリー・ハウスの様式を想わせる。カントリー・ハウスのホールの端には、三つのアーチがあって、それぞれ、バツテリー (buttery)、キッチン、パントリー (pantry) に通じていた。食事の際に、このアーチの下を通して食事が運び込まれたわけである。ただし、ホールとバツテリー、パントリー、キッチンは同じ平面上にあった。スマウグのホールは左端のアーチの下から石段が上がっている (ホールが低い場所にあるから)、その点は違う。

こうして、挿絵を見ると、中世的なものが色濃く表れているのに気付く。

The Hobbit を成立させた背景を探ってみた。OE の謎詩と叙事詩 *Beowulf* の影響、ドイツや北欧文学における竜の意義、英国竜文学の変遷、挿絵における中世の伝統など、この作品を生み出すにあたって、ヨーロッパと英国の中世が、どれほど深くかかわっているか、いささかの驚きと共に再認識した。中世文学を専攻し、中世以来の伝統を保つ大学に生活する作者にとって中世は過去ではないのだろう。だから、神話の世界にまで遡って行ったのであろう。トールキンの時の意識についても、多少は、実感できるようにおもう。

注

- 1) J. R. R. Tolkien, *The Father Christmas Letters*, (George Allen & Unwin, 1976)
- 2) J. R. R. Tolkien, *The Hobbit*, (1937 ; rpt. George Allen & Unwin, 1977)
- 3) 渡辺茂編著「マザー・グース事典」(北星堂書店、1986年) p. 157
- 4) Beatrix Potter, *The Tale of Squirrel Nutkin*, (Frederick Warne, 1995)
- 5) 羽染竹一編訳『古英詩大観』(原書房、1985年) p. 484
- 6) J. R. R. Tolkien, 'Beowulf: The Monsters and the Critics' in *The Monsters and the Critics and Other Essays*, (George Allen & Unwin, 1983) pp. 5-48
- 7) Michael Alexander (ed.), *Beowulf*, (Penguin Books, 1995) (OE 版)
- 8) 力強い巨大な人、Beorn も、モンスターの中に含まれないだろう。彼は、その名の通り、熊に変身する。変身はギリシャ神話以来、よくあることだが、特にしばしば変身するのがケルト神話である。
- 9) 相良守峯訳『ニーベルンゲンの歌』前篇、後篇(岩波書店、昭和38年)
- 10) 谷口幸男訳『アイスランド・サガ』(新潮社、1979年)の中に、『ヴォルスンガ・サガ』が入っている。
- 11) 鶴岡真弓『装飾美術・奇想のヨーロッパをゆく』(NHK, 1998年) p. 60
- 12) *The New Oxford Illustrated Dictionary*, Vol. 1. (Oxford U.P., 1976) p. 294
- 13) 鶴岡真弓 op. cit., p. 59 オスロ教会よりも、鶴岡氏の撮影によるボルグンド教会の屋根飾りのほうが、はるかに竜に近い。
- 14) Statens s johistoriska Museum, *Wasa*, (The Royal Printing Office, 1974) pp. 33-4
- 15) Kenneth Grahame, *The Reluctant Dragon*, (Collins, 1975) first published by Bodley Head in 1898
cf. Kenneth Grahame, *The Wind in the Willows*, (Methuen, 1976) first published in 1908
- 16) Edith Nesbit, *The Last of the Dragons and Some Others*, (Puffin Books, 1978)
'The Last of the Dragons' was first published in 1925, and 'Some Others' were first published in 1900.
- 17) J. R. R. Tolkien, *Farmer Giles of Ham*, (Unwin Books, 1975) first published in 1949
- 18) C. S. Lewis, *The Voyage of the Dawn Treader*, (Puffin Books, 1975) first published in 1952
- 19) 『広辞苑』その他。
インドの竜は彗星になるともいわれる。また、カンボジアでは、蛇は国を造った神と

考えられ、仏陀像も蛇に取り巻かれているようだ。

20) Henry Sweet, *The Student's Dictionary of Anglo-Saxon*, (Oxford, 1973) p. 214

21) 岩波書店出版、『図書』、1998年、4月号。坂本勝氏著「一夜孕み譚のゆくえ」によると、「大地や自然が優象無象の生命をこの世にもたらすことを古代語で「ムス」という。……「虫」はその連用形が名詞化したもので、蛇はとりわけ威力のあるムシだった。……人もまた「ムスコ」「ムスメ」として生をうける。だから、人間もそうした「ムシモノ」の一つに過ぎない。」とある。ムシと蛇、そして生命の関係が面白い。西欧の竜も生命の源と繋がりがあられるかもしれないが、浅学で説明できない。

トールキンが熱心なカトリック教徒である。ルイスはキリスト教の布教に非常に力を尽くした人で、にもかかわらず、竜が好きでたまらないところが興味深い。

22) この脱落原稿は1974年に発見され、今では読むことが出来て喜ばしい。Cf. イギリス児童分学会編、「児童文学世界」

23) *The Reluctant Dragon* の初版は1898年だが、フォートナムのイラストの著作権は1959年である。

24) ダールの大部分の児童書にブレイクが挿絵を入れている。ダールの野性的な、多少、毒のあるユーモアと、ブレイクの途方もない人物がびたりとマッチした、絶妙なコンビとなった。現在、英国に優れたイラストレーターは多いが、ダールにはブレイクでなければならない。ブレイクが、その才能を最高に発揮した例が、*George's Marvellous Medicine* (Puffin Books, 1982) で、この場合は、ダールがブレイクのイラストに助けられているようにさえ感じられる。

ブレイクは専ら人物を画いていて、人間以外に興味がないかと思われるくらいであるが、ダールの遺作となったエッセイ、*The Year* (Jonathan Cape, 1993) には、しみじみと心にしみ入る、美しい、穏やかな、いかにもイギリス的な水彩の風景画を画いている。水彩画家だったのかと、認識を新たにする。

25) John & Priscilla Tolkien, *The Tolkien Family Album*, (Harper Collins, 1992) p. 22, p. 32

26) J. R. R. Tolkien, *Mr. Bliss*, (George Allen & Unwin, 1982) 本の内容が車の運転を扱っていることから、1932年に車を買っているの、このころの作と思う。

27) *The Hobbit*, De Luxe Edition, (George Allen & Unwin, 1976)